

西松会新聞

西松会
一橋大学
ア式蹴球部
http://jfn.josuiikai.net/circle/soccer/

滞米はや40年、皆さんこんにちは

私が一橋ア式蹴球部に在籍していたのは昭和30、33年でした。戦後やっと食料不足の時代も過ぎ、戦後復興の時期も落ち着きを取り戻し、小平の体育館で夏の合宿を行っていました。10日間の合宿でしたがお米を持参しなくても、小平寮のまかないで三食が可能で

した。

忘れぬ松本大先輩

此処で忘れられないのは、一橋サッカーの創始者、松本正雄大先輩です。松本先生は若くして古河電工を辞められ独立して弁護士となり、ながらも第二弁護士会(民事関連)の会長を勤められ法曹界の要職を兼ねられました。私は部のマネジャーをやっておりますが、サッカー部の財政的にも、卒業生の就職に際しても大変お世話になりました。先生よりはたとえ勤め人になっても自己を忘れず常時研修し、悔いのない人生を送るよう教えていただきました。

帰国は年に1回

私の人生略40年をアメリカで過ごしております。入社した東芝に15年勤め退職し、爾後アメリカに移住し、結果的には日本本社の駐在員と言う身分を捨て、然し弁護士とか会計士など、生きていくための専門資格を取得することもせず、家族4人を抱え、如水会員の常識から言えば全く向こう見ず、全くバ



国際家族に囲まれて

3年間ありがとうございました

2008年、引き受け手が誰もいないという状況の中、「2年間なら」ということで代表幹事を引き受けさせていただきました。当初の予定よりも1年長くなりましたが、西松会の運営には、できるだけ多くの方に関与していただくのが良いのではないかと、との考えの下、今年の総会で皆様からご了解をいただくことが条件となりますが、代表幹事を卒業させていただきたいと思っております。

この3年の間、西松会はどうあるべきかという課題に私なりに向き合ってきました。「愛着の持てる会にしたい」「気軽に参加できる活動にしたい」「現役諸君にはできる限りの支援をしたい」といった思いでいろいろなことにトラ

カゲたお先真つ暗な人生選択を行いました。家族親戚も日米に別々に出来てしまい、ニューヨークではクロアシア系のアメリカ人の親戚もおり、いわば国際家族として過ごしております(と言っても国際不倫じゃありません。子供たちの選択結果)。

日本へは、毎年一回のペースで往復しており、2週間は埼玉県久喜市にある長男の病院で過ごし、残り一週間は新宿京王プラザにて過ごしております。40年近くもアメリカに住んでいると、中々簡単に日本へ引き上げるのができ難いのです。いずれどの国で終末を迎えるか難しい問題ですね。

さて日本の私どもの拠点の話ですが、長男はアメリカ医大を卒業後日本に戻り埼玉県のド田舎で先輩と共に総合診療を掲げ先端技術売り将来志向の地域医療を始めました。詳細は私のホームページ

www.nokosku.com 参照ごう。

息子はニューヨークで高校のときから私のアシスタントとして日本のある中小企業の最先端医療器のニューヨークの有名病院相手に臨床テストの走り使いをやっておりますが、日米両方の医師免許を取得し、希少価値があるので日本で縁あって先輩と開業できたもの。目指すは日本の患者が志向する一流大学病院、大規模病院を反面教師として患者サービスに徹した医療を開始した。例えば埼玉のド田舎の小さな病院のデスクでITの発達により全世界から瞬時に数百、数千の症

例を瞬間的に集め分析ができる世の中になっちゃったのですね。お医者様のやる気があればの話ですが。娘は日本の大学を経て、日本語の力を付けてニューヨークで私のアシスタントとして過ごしてきました。

日本では点滴治療

私はその病院に2週間も入院して何するかって？ 私は毎日朝から晩まで点滴をしています。アメリカやヨーロッパでは点滴は危険だからと言って病院でも大怪我でもしない限りやってくれません。私の目的は血管循環障害後遺症の為の治療です。これで私は発症後9年間も何とか生き延びられました。

現在の医療技術の発達は恐るべきスピードですが最近の分子生物学によれば突き詰めて言っても同じ病名の100人でも100通りの異なった患者ゆえ、100通りの異なった治療方法が可能になるということ。患者一人一人に異なった薬や治療法を行うとなると、スーパーコンピューターが必要になります。ニューヨークでは既に Mount Sinai Med センターで治療が始まりました。現在残されている大きな分野が脳疾患と癌の治療ですね。最近の文春をお読みいただければ、これについては現在何も基本的に見通しが無いことが深読み出来ますね。

今後の医学の進歩に期すること大です。

林 祐三(昭和33年卒)

心から願っていると思います。

この2年は会場が関西であったにもかかわらずOB戦の参加者は一橋が最多であり、OB戦、三商大戦が幅広い年齢層の交流の場として、定着しつつある感があります。

昨年の西松会新聞でご支援をお願いしました会費の集まり具合も、私の就任当初と比べ50%近く増加し10年度は340万円強を集めることができました。過去の財産を取り崩しながら活動して行くという流れによりやく歯止めをかけることができそうです。これも会員の皆様のご理解と、現役諸君の熱心な寄付回りの賜物と、大変ありがたく思っています。

リーグ戦で、試合に出ている選手も出ていない選手も一体になって、一所懸命戦っている姿を見ると、いつも熱く胸にこみ上げてくるものがあります。西松会の会員であれば、誰もが一橋大学サッカー部が良い結果を出すことを

センタリングを空振り、40年前の古傷

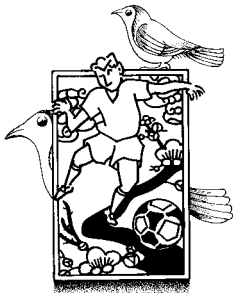
私が小平でサッカーをしていた1960年代後半といえは、64年の東京オリンピックでベスト8、次のメキシコ大会では銅メダルを獲得するなどサッカーの人氣が上がり始めた頃でした。メキシコでの金本選手の活躍は印象的でしたが私にはむしろ、その前のアジア予選での韓国戦の方が記憶に強く残っています。3:3で迎えた終了間際、韓国が放ったミドルシュートがキーパーの手を掠めゴールマウスへ。悲鳴とともに下宿の万年床の布団に突っ伏したその耳にバーをたたくカーンという音が響きました。今でもあの乾いた音が耳に残っています。もし、あのシュートが入っていたら、メキシコの銅もなかったわけです。

一方、わが一橋サッカー部は私が入学する前年に関東2部リーグから降格したばかりで復帰に向けてスタートした所でした。キヤプテンは高峯さん。我々一年坊主から見るとほとんど「オッサン」で、気楽に話が出る対象ではありませんでした。グラマネの小さな

同期は11人です。サッカー部だけにイレブンということでしたが、卒業後、丸山君が亡くなった10人となってしまいました。サッカーも学業成績もイマイチの学年でしたが仲は良かったですね。だからこそ11人も残ったでしょう。

私にとって、先輩・後輩含めたサッカー仲間と過ごした4年間は人生の大切な宝物です。皆さんもそうでしょうか？そう思える何かがわが一橋サッカー部にあるのだと思います。

小島 収(昭和46年卒)



1点の重みに泣く 東京都3部リーグ戦

平成22年度の東京都大学3部リーグ戦、一橋は7勝2敗の勝点21と3位に終わった。今季も2部復帰はならず、来シーズンに昇格を期することになる。

滑り出しは好調だった。もたつく場面もあったものの自由学園、東工大、国際基督教大を突き放し3連勝。このまま勢いに乗ればと期待が高まったが、第4戦の創価にはパス回しのミスもあり、1:3と思わぬ敗戦。

しかし、心機一転、5戦以降は明治薬科大、農工大、東京外語大を撃破して、10月24日に優勝、昇格をかけた日大商との戦いに臨んだ。前半に一瞬の隙を衝かれて1点を失うも、後半には徐々にペースを掴み、反撃に転じた。しかし、ツキにも見放され、ゴールを奪えず0:1の敗戦。引き分けなら可能性があった2位確保は絶望となった。

3年連続、3位、3部残留の悔しい結果となった。あと一步の壁の厚さを思い知らされたが、すでに新4年生を中心に新しいチームづくりが始まっている。期待したい。

平成22年度東京都大学リーグ3部戦績表															勝点
チーム	日大商	創価	一橋	日大生	東工大	東外大	自由学園	国際基督	農工大	明治薬科	勝	敗	引	点	
日大商	-	0●1	1○0	2○1	2○0	3○2	1○0	4○2	4○0	6○1	24				
創価	0●1	-	3○1	6○2	4○0	2●3	2○1	3	2△2	5○0	22				
一橋	0●1	1●3	-	1○0	3○1	4○0	4○1	9○1	4○0	6○1	21				
日大生	1●2	2●6	0●1	-	6○1	7○1	5○0	3○2	6○3	9○1	18				
東工大	0●2	0●4	1●3	1●6	-	1○0	0△0	2○1	4○0	3○0	13				
東外大	2●3	3○2	0●4	1●7	0●1	-	2○0	0●1	2○0	4○0	12				
自由学園	0●1	0●1	1●4	0●5	0△0	0●2	-	3○0	2△2	3○0	8				
国際基督	2●4	1●3	1●9	2●3	1●2	1○0	0●3	-	0△0	1△1	5				
農工大	0●4	2△2	0●4	3●6	0●4	0●2	2△2	0△0	-	0△0	4				
明治薬科	1●6	0●5	1●6	1●9	0●3	0●4	0●3	1△1	0△0	-	2				

戦いを終えて

大きな目標を立てる 大切さ

OBの皆様、現役部員に対する平素からの御支援、誠にありがとうございます。特に、秋季リーグ戦におけるOBの皆様の御声援には、勇気と自信をいただきました。しかし、そのような格別な御支援・御声援を賜ったにもかかわらず、秋季リーグでは、目標とする2部昇格ということを果たすことができませんでした。現役部員を代表し、深くお詫び申し上げます。

4 年間のア式蹴球部活動を通じ、私が最もこの部に欠けていると感じたことは「大きな目標を立てること」です。ここで私の述べる目標とは、部の目指すところ・個々人の目指すところと、部の目指すところ・目標とは、現実的なビジョンを組み達成可能なものにするべきだ、と考えている方は大勢でしょう。しかし、あまりに小さな目標を立てたとしたら、目標の達成への容易さから、そのチーム内の選手は練習努力を怠り、成長は格段に遅くなってしまう。逆に、大きな目標を立てると、仮にその目標に届かなかったとしても、目標に届くように努力するため、小さな目標を立てた場合よりもチームや選手の成



長は見込めるでしょう。具体的に言えば、ここ数年のア式蹴球部では、チーム目標として「秋季リーグにおける3部優勝や2部昇格」、個人の目標として「スターティングメンバーになる」「ベンチメンバーに入る」というミクロな世界で測った目標が多いです。このような目標設定では、各選手の成長が遅くなり、伸びる選手も伸びず、勝てるチームも勝てなくなってしまうと私は考えます。現にここ数年間、「秋季リーグ昇格・優勝」というビジョンを立てて、満足のいく成績は残せていません。

現役を退いてしまった私にできるのは、OBとして、現役部員に対し「大きな目標の大切さ」を述べる事です。現実的に考えるアタマができてしまっている「常識的」な部員に対し、恥ずかしくても勇気を出して高い目標を設定する事の大切さを、伝えることです。是非、OBの皆様も「秋季リーグ昇格・優勝」ではなく、「総理大臣杯全国大会出場」「東京都選抜に選ばれる選手を出せ」のような大きな御声援を出してみてはいただけないでしょうか。

星 達也（主将、4年）

すべては

「オン・ザ・ピッチ」で

私はこの1年間の部活動において、何一つとして楽しいことはなかった。なぜなら試合に出て活躍していないから。サッカーとは、サッカーをすることによってのみ充足されるものだとは私は考えている。サッカーをするためにこのチームに入り、試合に出れば勝利を望む。そのためにピッチの上で何が出来るか。それがすべて。現在の一橋サッカー部はそのようなサッ

カー本来の姿とはほど遠いように思う。そしてその象徴が我々の学年であり、私自身であろう。サッカーをしない者が、サッカーをやるうと叫んでいるのは何と滑稽な姿か。チームをまとめる立場の者がこのような矛盾を抱えていればチームに影響が出るのも必然。それがピッチ上での脆さや甘さとして現出したのが今季のチームだったのではないかと思う。

すべては「オン・ザ・ピッチ」で語られるべき。同じ学生としてチームを牽引するのであればプレーで示すことが一番明確だ。伝える側も受け取る側も未熟ならば尚更である。監督がいらないからこそ選手はあれこれ工夫する。試合で感じたことを伝えようとする。「戦術が」、「システムが」、「主体性が」どうたらこうたら。まだまだコミュニケーション能力の未熟な我々は、すぐにどこからか借りてきた言葉、型や方法論に頼ってしまう。

しかし「オフ・ザ・ピッチ」の言葉は響かない。肝心なのは出来るかできないか。自ら問題を難しくしているのだ。もっと簡単な言葉で良いのである。

大学のカリキュラムも変わり、これから新入部員の確保も難しくなるだろう。しかし、余計な説明も勧誘も必要無いのではないか。聞くべきは一つ、「サッカーが好きか?」。古い少年漫画のようだが、忘れてはいけないことだと思う。

村井 佑治郎（GM）

悩み続けた

自分の存在意義

1年目、2年目とただがむしゃらにサッカーと向き合ってきた。ベンチにさえ入れない状況をとにかく打破したくて、自分がうまくなることしか考えていなかった。

3年目になり、「上級生として後輩のことも考えたりせなあ」と思っていたら、先輩に「3年目は一番伸び伸びやれて頑張れる年やから自分のことだけ考えとけばいい」と言われ、そんな偉大な先輩たちのおかげでプレーに集中でき、そんなにチームに対して考えたり、自らアプローチしたりすることはなかった。

ところが4年目入ってすぐに、3年生からチームについての悩みや部活の雰囲気悪さを打ち明けられ、自分が先輩にしてみらったことを果たしていないということに気付いた。いろんなことに対する自分の甘さにも気付かされた。

そんなこともあって、4年目は、チームのために自分を犠牲にしようと思った。将来の進路よりも部活を優先したし、チームのためにGKをやることも選んだ。全てはチームのために、2部昇格のためにと。

そうしてGKをやることで何度も葛藤した。正直FWに戻りたいとも思った。試合に出たくないと思った時もあった。結局GKとして秋季で勝利に貢献することが出来なかったし、そういったことから引退する瞬間まで自分の存在意義で悩み続けた。恐らく今までの人生の中では今年が一番悩み考えさせられ、苦しい年だった。しかしこうして引退してみても、GKをやれて良かったと思う面もある。あれだけの人数があれだけの環境でサッカーをするにはやはり犠牲になっている人もあるし、サポートしてくれる人がいてこそ成り立つものだ。それは例えばGMやマネジャーであったり、OBの方々である。これからはOBの立場として、後輩たちが少しでも良い環境でサッカーに打ち込めるようにサポートしていこうと思う。

西尾 隆太（副将、4年）

今年は頑張り甲斐のあるチームに

12月中旬、4年生を送り出す追いコンで部活生活の総括を話す予定でしたが、みんながあまりに簡単にあつという間に酒に吞まれ、話せなかったのが、この場を借りて述べたいと思います。

4年生になるときの4年生としての僕の目標は、「誰もやめない部活にする」ということでした。1年生の時には、い的一年に部活をやめそうな部員というやや不名誉なレッテルを貼られ、僕自身、何度もやめようと思ったことがありました。

1、2年の時に実際に辞めなかったのは、一つは部活が好きだったからというものもありますが、辞めようと思ったタイミングで他の部員が辞めていったから。3年以降は、会計という仕事で縦の繋がりの大切さを学び、たくさんした後輩がいることにやり甲斐を感じ、引退する今になって、本当に部活を続けていて良かったと思えました。だからできれば誰にも辞めてほしくない。

プレーヤーとしては有り余る伸びしろを伸ばしろのまま残ってしまったのが残念ですが、12月5日、新人戦2回戦を観にいつて、すごいチームが残ったことは喜ばしいことです。強いという意味でも、まともという意味でもとても頑張り甲斐のあるチームだと思います。現役のみんなはこれを継続していきましょう。

最後に、たくさん迷惑をかけてきたOBの皆様、優しく接してくれた先輩、今まで一緒に戦ってくれた同期、楽しい部活にしてくれた後輩のみんな、陰ながら支えてくれたマネジャー達、本当にありがとうございました。

守本 朋弘（会計、4年）

それなりの

覚悟と動機を

OBの皆様、日頃より多くのご支援を賜りありがとうございます。学生主体の私達にとつてOBの皆様の存在は、基本に立ち返り、自身を見つめ直す機会としてとても貴重なものであります。

昨シーズンも東京都3部で3位となり、これで3年続けて2部昇格を逃す結果となっていました。今季こそはと意気込んで、これまで以上にチームの事を考え練習して参りましたが、力及ばず努力足らずで、非常に申し訳なく思っています。

4年間を通じて私が最も感じたことは、これはサッカーに限らずですが、上手くなる、成長するというのは案外とても難しく、生半可な努力や気持ちでは成し得ないということです。ともすれば言い訳を作って妥協してしまいがちで、特に大学生活には、サッカー以外にも魅力的なものが満ち溢れています。確かにサッカーは好きだけれど、私がそうであったように、サッカー部にいる意味を見失ってしまうことも多いのではないかと思います。

成長できない人間を擁護するつもりはありませんし、現役部員達にはそれを周りのせいにして欲しくはありませんが、サッカーに対して精一杯の力を注ぐためにはそれなりの覚悟や動機が必要で、それを生み出す何らかのきっかけは、OBとなった私にも与えられるのではないかと思うのです。私は秋季に出られず、個人的にも後悔だらけの4年間でしたので、これから部活に対して常に当事者意識を持ち続ける準現役部員でありたいと思っています。

植村 康太（4年）

先輩、後輩にただ感謝

私が、4年間の現役生活を振り返って思うこと、それがこのタイトルです。私は、中学、高校とサッカー未経験でこの部に入部させて頂きました。頑張ってきた「つもり」ではありましたが、4年間、一度もリーグ戦に出場することも出来ず、チームとしても2部からの降格、3年連続3部残留と何も結果を残すことが出来ませんでした。むしろ、実力不足からピッチの上で不甲斐ないプレーをして周りの足を引っ張ることも多く、4年間トータルで見たと時に、私はチームにとってマイナスであったのではないかとすることもしばしばあります。いつもご支援いただいたOBの皆様、頑張ってきたチームメイトに対しては今でも本当に申し訳なく感じています。一方でそんな私でも暖かく迎え、可愛がつて下さった先輩方、やさしく接してくれた後輩たちには誠に感謝しています。

もはや後輩たちには言い残せることも私にはありませんが、ただただ、現在の有能な後輩たちがその実力を遺憾なく発揮して昇格してくれることを祈るばかりです。今年もピッチには足を運んで、そんな後輩たちの姿を見届けられたらと思います。

横溝 英大（4年）

あと二歩の

ブレイクスルーとは

サッカーの技術理論も持たないサッカーのファンとしてここ数年感じていることを述べて貰う。

日本代表の昨年半ばまでの試合を見ると安全第一でボール支配率を高めようとする結果、最終ラインに近い所でのパス回しが多い。加えて前線の動きが十分でないため得点するのに必要な前への鋭いパスがなかなか出ない。フォワードまで渡り得点のチャンスと思っても思い切りの良いシュートを打たず、もう一度持つかあるいは他のプレーヤーへのパスで終わってしまうことが多い。リスクを取ってまで得点を入れるのだという迫力に欠ける試合運びが多かったように見え、観戦している人間にとつてはフラストレーションの溜まるものだった。

これを参考にしているためかＪリーグの試合も似通った展開が多く、後輩の学生の試合にも同様な点が見受けられた。

１年前、高校時代の後輩でプロのコーチをやっている人間と一杯飲みながら「日本代表がこのような迫力の無いサッカーをやるから底辺までこれを勘違いして同じようなことをしているのでは」と言ったところ、彼のコメントは「底辺の意識、レベルが低い連中が上がつて来ても代表のレベルはなかなか上がらない」だった。いずれにせよ、我が国全体に似たような問題があったのであらう。

ところが昨春秋、ザッケローニが日本代表の監督になり、それまでの「相手を恐れずで攻撃していく」という方向性に変わった。ボールを奪つたら素早くカウンターで攻めるといふ点が徹底された結果が、今回のアジアカップの優勝に繋がったのではないかと感じるし、テレビ観戦を楽しめた理由でもある。

小生はここ数年、現役の公式戦の大部分を見ているが、同じ傾向が見受けられ

るのが気になっていた。最終ラインで展開を図るためのパス回しが行われる。しかし、その間前方のプレーヤーのパスを受ける動きが少ないため、足元へ出すか大きくロングパスを出すかの選択しがなく、相手ディフェンスの思う壺にはまってしまう。これでも、相手より技術的に上であれば得点もでき、勝つこともできるが、相手が我がチームと同様か少しでも上であればなかなか勝てない。これが正にここ３年間の結果に繋がっているのではと思われる。

「２部へ昇格するのだ」という強い意志は絶対に必要だが、それだけでは十分でない。この目標を達成するには、プレーの質をいま一つ上げることが大方針として１年間努力することが必要ではないだろうか？

清水 征四郎（昭和41年卒）

「FC東京J2降格」は他山の石

FC東京は2010年シーズンで16位に終わり、2000年以来キープしてきたJ1から初めてJ2に降格することになった。

今野、長友、石川、平山、徳永、権田、羽

生、大黒、米本、森重

など10人も日本代表選手を排出しながら、今回のJ2降格となつてしまった。なぜだろう？

今回は「FC東京J2降格」の原因を分析することで、一橋大学ア式蹴球部のチーム運営をするうえでの参考になればと考え、自分なりの分析を投稿することにした。

まず、2010年シーズンの上位3チームと下位3チームのチーム成績を見てみる（上図）。

FC東京は8勝12分14敗となっており、引き分けの多さが目につく。しかし、引き分け数では1位が新潟で13、2位が鹿島とFC東京の12となっており、引き

自分で決定を下す能力を、オシムの痕跡

前評判を覆してワールドカップでベスト16入りを果たした岡田ジャパン、そして苦しみながらもアジアカップを制したザックジャパン。嬉しいニュースが続いたから、サッカーファンにとつて、この人の名前もはや記憶の彼方かもしれない。

イビチャ・オシム。この指揮官が日本に残した言葉は、サッカーという枠を超えて、私の心を打った。代表チームでオシムの通訳を務めた国際ジャーナリスト千田善さんの「オシムの伝言」（みすず書房は、一氣に読まずにはいられないかった。

旧ユーゴスラビアで延べ10年生活し、民族主義が戦争に突入していく過程をつぶさに目撃した千田さん。ボスニア・ヘ

ルツェゴビナ生まれのオシムの生きざまを理解できるだけに、その言葉を、言葉の持つ意味を伝える役回りには、まさに適任だったと思う。

著書ではオシム語録をふんだんに紹介しているが、サッカー理論だけでなく、それを貫く思想を千田さんなりの解説を加えている。だからサッカー本というより、オシムの風ふうも手伝つてか、ある種「哲学書」の香りも漂っているのだ。

「日本は学校も社会も、教師や上司のことを守り、秩序を乱さないものが『優秀』という価値観で動いているが、それではサッカーは強くない」とオシム。別の場では「日本人の特性なのかもしれないが、誰かが、こうすればいいと言ってくれるのを待っているように見える。自分で決定を下す能力を身

分けの多さが直接J2降格に結びついたとは考えにくい。実際、引き分け数がほぼ同数の鹿島が勝ち点60で4位、新潟が49で9位となっている。

やはり、負けの多さがJ2降格の大きな原因と考えられる。では、負けの原因を分析してみよう。

失点で見ると湘南が82失点、京都が60失点となっており、この2チームは失点が降格の原因となつたことがわかる。一方FC東京は失点41となっており、下から6番目に失点が少なかった。失点数が降格の直接的な原因とはなっていないと考えられる。

FC東京降格の原因のひとつは得点力不足で勝てないということにありそう。では2009年度はどうだったのだろうか。

2009年度は得点47、失点39、16勝5分13敗のリーグ5位という成績であった。2010年度と決定的に違つていたのは、石川が絶好調で15得点、カボレが5得点、赤峰5得点、平山4得点とFW3人が続いていたことである。この結果引き分けが5と少なかった分、勝ちが16に伸びていたのである。

につけるべきだ」とも。

指示待ち人間、監督（上司）依存症から脱却しろ、というこの教えは、企業などの組織論にも通じる。入社式、入学式の季節、新人に贈る言葉としてふさわしい。

「勝つことには、さまざまな要素が含まれている。ただ結果として、勝つてしまえば、そういうことが見えない。敗北は最良の教師である」。これは惜しくも2部昇格を逃した現役チームに囁みしめてほしい。

紹介はこのぐらにとどめておく。たかがサッカーと言うなかれ。されどサッカーである、実に奥深い。ご一読を勧める。

橋詰 邦弘（昭和56年卒、共同通信社勤務）

必要な最上級生の視点

今回は敗れて、3年マネジャーとして後悔したことを書かせていただきたいと思います。

2年生頃から、マネの仕事の効率性や役割などについて自分なりに「これをした方がいいのでは」「あれはもっと違うやり方があるはずだ」と様々なことを感じ、考えました。しかし3年生になってみると、先輩マネの築いてきたことを維持することに精一杯でした。思い描いていた事と実行する事との隔たりに大きな不安と無力感を覚えました。

そして私は、3年マネを取り巻く状況を下の学年の頃からしっかりと分析出来ていたら、この隔たりを小さくでき、もっと上手く3年マネの役割を果たせたのではないかと後悔しています。現在、一橋大学ア式蹴球部は3年連続で3部3位です。マネジャーの私が言うのもおかしいですが、やはり先輩方のおっしゃる通りに、「何か」が必要なのではないでしょうか。

そして、その「何か」についてですが、私の3年間を振り返ると、少なくとも「自分が最上級生だったら、自分がこの人の立場だったら」という視点を片隅に持つことが必要ではないかと思えます。

大学生活の大半を過ごした一橋大学ア式蹴球部は、私の誇りです。部員のみんなや支えてくれた方々がいなければ3年間続けられませんでした。感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

偉そうなことを書きましたが、21歳の稚拙な反省だと読み流していただけたらと思います。とにかく、2011年こそは絶対昇格してほしいです。

内山 朋美（マネジャー、3年）

チーム運営に積極的なかわりを

サッカー部のマネジャーを3年間やって思ったことは、本当に家族のように仲の良い団体だということ。す。

私は主務と学連の仕事を通して、学内の他の団体や、他大学のサッカー部など様々な団体を見してきました。大学では決して目立つ団体ではないし、東京都の中でも上位に位置している訳ではないけれど、皆チームのことが好きで、サッカーに一生懸命で、他団体の人からは常に羨ましがられるくらいプライベートでも仲が良く、私はそんなチームメイトが大好きでした。

人数も比較的少ないし、他団体に比べてメンバー間の絆が本当に強いチームだと思うので、皆が様々な形でもっと積極的にチーム運営にかかわっていったら、もっと上にいけるはずだと思います。

マネジャー、プレイヤーに拘らず、チームメイト全員が日々の練習以外でも積極的に部活に関わっていったら、より上のリーグで戦っていけるのではないかと感じました。今年こそ絶対2部昇格を達成してほしいと思います！

山下 夏実（主務・学連、マネジャー、3年）

「女子ドラ」ならぬ「西松ドラ」を 愚直に地道に一生懸命

遠隔地で勤務していることから小平に参上できず、督促頂いた会費の納入で首の皮一枚西松会にぶら下がっており恐縮しております。

今回寄稿の機会を与えていただき感謝いたします。最近では、ホームページの動画で現役の雄姿を拝見し、また樋口さんの生々しい戦況報告をメールで拝読しここ英国でも皆さまの熱い想いを共有させていただいております。近況報告及びサッカーへの想いを投稿させていただきます。

卒業後トヨタに入社し、国内・カナダ・トルコそして現在英国で生産現場の経営に携わっております。景気低迷と昨今の品質問題からのお客様信頼回復のためサバイバル&リバイバルに日々精進しているところであります。

製造現場では、「3フェーズ+1」を掲げ地道に基本の徹底を実践中です。メンバーの基本技能・習熟度を上げ工程に適正な人員配置をするフェーズ1、決められた標準作業を徹底するフェーズ2、



BBCラジオでカズルーン戦の勝利を的中

改善を継続するフェーズ3、そしてお客様への不具合流出を絶対に許さない改善ゲートのプラス1活動を愚直に推進中です。環境意識の高い欧州のお客様の近くでハイブリッド車の生産も開始しました。

一方本場英国に在籍し、サッカー熱も上がっております。昨年の現役の活躍、ワールドカップ、グランパスの優勝、また息子が高校でサッカーしていることから自ずとテンションが上がっております。これら直近目に入ったサッカー事情と業務から乱暴に想いを総括し現役にメッセージをお伝えします。

まずは個人の技量を磨くフェーズ1。無回転FKの本田・1対1は負けない長友・ヘッドの閼利王・スピードの岡崎、誰にも負けない技能を磨いて下さい。

フェーズ2。個人の技量を生かすチーム戦術、攻撃・中盤・守備の標準パターンを3つ掲げひたすら日々の練習で標準化する。アイコンタクトのできるまで徹底的に繰り返す。

フェーズ3。試合での実践トライを通じて標準パターンを進化させる。

プラス1は、やり遂げる拘り・情熱とチームワーク。試合に出る出ないは関係ない、一人一人が自分の役割をコミットして愚直にチームに貢献する。スーパースターのいるチームが勝つのではない。一人一人が必死に向上心を持って努力し、チーム全員で情熱を持って日々の練習・試合に取り組む、そんなスベイン、グランパスが勝つのです。

年末に一時帰国して、「女子ドラ」を斜め読みしました。樋口さんには、今年現役優勝と同時に、一橋大学ア式蹴球部版の「西松ドラ」を出版されることを切にお願い申し上げます。

末筆ながら、現役の活躍と西松会の皆様の益々のご健康とご活躍を祈念いたします。

山木 達生
(昭和59年卒 トヨタ勤務)

チームの力をどう創り上げるか

就職し、働き始めてから27年になるが、現役の時間が残り少なくなるにつれ、今の自分は何に意味づけをして仕事すべきなのか考えるようになってきた。

私の勤務先のようにモノ作りをしていない企業にとつてより大切なことは、そこで働くひとりひとりが自分を磨き育て、その価値を高めていくことだと思う。

現在の勤務店の経営職階のひとりとして、職位の節目を迎える若手社員と個人面談する機会があると、最近ではこんな話をするようにしている。

1. 自分の価値とはなにか？

今の価値＝自分はどういう点でお客様さまやチームの役に立っているか、存在を評価されて（認められて）いるか？（↓現状認識）

今後（将来）の価値＝あなたはどのような自分になっていきたいか？（↓役割・責任・使命）

2. 今の自分の価値はどのようにして作られてきたのだろうか？

具体的にどんなことが価値形成に役立ったのだろうか？（↓人財育成・指導）

3. 今後（将来）に向けてどんな価値を加えていきたいか？

身の回りや社内外にロールモデルになるような人はいるか？自分を強く駆り立てる夢や目標を持っているか？（↓情報収集、方向感・ビジョン）

4. いま具体的に何かしているか？今後何をしていきたいか？

いま目の前にある仕事だけにとらわれず、目標達成に向けて何が必要か、何をしていくべきか？（↓具体的行動・先行投資）

5. やりがい・生きがいを感じられる仕事をしよう！

何にそれを感じるかは人それぞれ。その上で、まずは目の前の仕事に、より積極的・主体的に取り組む、ベストを尽くそう。

次代を担う人たちがより良く働くため、より良く生きていくための機会になればと思っているが、どこまで伝わっているかはわからない。

からない。

人間は他人から何か言われただけで変わるものではない。自分がそこから何かを感じ、強く信じて、こう変えたい、変わりたいと思ひ、努力し続けたい限り、そう簡単には変わらないものだと思う。

それだけに、いい方向に変わることができた人間のパワーには目を見張るものがあるのだろう。

チームの中の個、個の集積としてのチームの力を、リーグ戦を迎えるまでに、それぞれのようにして、どこまで持っていくのか、シーズン当初に具体的にプランニングし、そのプログラムをチームとして意思統一・共有した上で、各人が目標に向かって主体的に進めていく、といった一本の太い軸と、それを何としてもやり遂げようとする強い意志・推進力がないと、今の状況を変えていくのは難しいかもしれない。

今年、卒業後初めてOB戦に参加した不肖のOBではあるが、後輩諸君の健闘を祈っている。

久木田 正樹
(昭和59年卒、三菱東京UFJ銀行勤務)

チャンスをものにするじつぞ大事

今回のアジアカップでは、相変わらず、大事な試合で惜しいところがありました。特に思い浮かぶのは、日韓戦、そしてオーストラリア出身の僕にとってはあの悔しい日豪戦です。

まず、日韓戦では同点で延長戦に入り、その前半PKで日本がリードを取りました。それから、日本は時間かせぎで努力するものの、後半の本当の最後の最後で韓国が点をもぎ取ってPK戦まで持ち込まれました。

そして、日豪戦では0対0のまま、同じく延長戦に入り、勝負が李選手の素晴らしいシュートで決まりました。当たり前かもしれませんが、これらの試合を観て、やはりサッカーは他のスポーツと違って、1点

暮れと正月は高校サッカー観戦三昧

自宅から日産スタジアムまではスクーターで10分、三沢球技場までは地下鉄で2駅と、地理的環境に恵まれているので、Jリーグの試合を堪能している。

日産スタジアムは、陸上競技場を兼ねた巨大なスタジアムでサッカー観戦に適しているとは言えないが、三沢球技場はサッカー専用でフェンスとタッチライン間の距離も5メートルと目の前でプレーを見ることが出来る。プレーヤーの体の使い方もよくわかり、素晴らしい芝生と相俟って、サッカー観戦に最適なグラウンドである。

暮れの12月30日に高校選手権神奈川代表（座間高校）の試合が三沢であり見に行つた。

略一方向的試合内容で座間高校が1対0で勝つた。続いて中京高と久御山高の試合があり、アーセナルに行く宮市が出るので観戦することにした。

前評判通り速く鋭い宮市のプレーは見ていて楽しいものであった。一方久御山高のプレーは今まで見たことのないものだった。即ち自陣深い位置でボールを奪つても、ロングキックをせずにドリブル或いはショートパ

スで攻め上がりシュートまで持ち込む事が何回もあり、またデフエンスもしっかりしていた。前半は宮市の活躍で中京が2対1とリードしていたものの、久御山が逆転する可能性もあり面白い試合になると思ったが、寒さが募り前半だけで帰った。夜インターネットで見たら案の定、久御山が4対2と逆転していた。

運の良いことに1月3日（3回戦）1月5日（準々決勝）と魅力的な久御山の試合と、力強いプレーが持ち味の滝川第二の試合（1月5日）を見ることができた。

決勝戦は久御山と滝川第二で争い滝川第二が優勝したが、スリリングな好試合で高校サッカーのレベルアップを実感した。

これ等の試合観戦を通じ、改めて認識を強くしたのは、サッカーという競技の多様性と指導者の重要性である。

高校生と言う比較的清純な年代の試合だけに物事の本質が鮮明に浮かび上がったのではないだろうか。何れにせよ日本のサッカー競技が向上しているのは喜ばしいことである。

高田 勝巳（昭和30年卒）

現役をやらせていただいていた2008年の秋季リーグを思い出すと、今回と同じく3位という結果で昇格達成できずという残念な結果に終わりました。しかし、その3位というのは優勝の回数の差と言うよりも、それこそ今回のアジアカップのようにいくつかのチームと引き分けて、いずれの対戦でさらに1点を決めていたら、全然違う結果になっていたわけです。つまり、そのうちの相手からたつた1点を奪うことによって、勝ち点を確保し、昇格につながっていたわけです。

サッカーは11人で戦うスポーツであつて、チームで練習し、スキルを磨きながらもちろんミスが減らすのも大切なポイントですが、一番大事なのはチャンスをつかむこと、というように考えたらいかがでしょうか。

ロバート・レッドセル（平成22年卒
クイーンズランド州駐日事務所勤務）

協会改革の目々を振り返って

Jリーグが開幕する 1 年前から 2002 年ワールドカップの 1 年前までの 9 年間を日本サッカー協会に在籍し、その間、事業部長 3 年・女子部長 3 年・審判部長 3 年を勤めました。事業部と女

子部は部を設立してから初代の部長であり、審判部は、初代部長が半年で病欠で退いたので 2 代目ということになります。岡野俊一郎さん曰く、「協会の柱は、1 に財政、2 に普及、3 に強化だ」と良く

さながら混声合唱団

その前に、一つお話ししたいことがあります。それは、日本協会というところは、大変恐ろしい職場だということです。「当たり前だよ」と云われたら当たり前なのかも知れませんが、サラリーマン生活がいかにぬるま湯の中に浸っていた生活だったということかと思えます。

職員は、普通の職員ばかりでなく、普通でない職員が混ざっている混声合唱団みたいなものです。普通の企業に就職できない大学サッカー部員を監督の顔で協会に押し込んだり、前会長の企業から送り込まれて来たり、身体を壊した元日本代表選手を匿ったりで、しかもその少数精鋭？が自分の堅穴住居に閉じこもり権限を保持したまま永年勤め上げてきていま

す。代表監督の例を見るように、実績が出せなければすぐ首が当たり前の世界です。その風土は、私のように 52 歳でどの

職員より高齢で外から専務理事が引つ張り込んだ場合ではなおさらです。「オシクラマンジューー 押されて泣くな」という言葉通り、隙があれば押し出され職場にいられないようにする、スポーツマンシップに欠けたいやらしい世界です。

再就職の時には、大企業病を捨てなければダメといわれますが、全くその通りでした。つまり、職員から見れば、「出るんなら、さあー、やつてもらいましょー！高い給料持つていくのではありませんか」ということでした。よく言えばプロの世界で、大企業はアマの世界ということですが（因みに給料は、部長職の 960 万円でした）。

先ずは、協会の事業部設立から天皇杯規程等の諸改革を思い出しながらお伝えしてみたいと思います。

「事業部時代」キリンカップ・アジアカップ・天皇杯

1991 年 3 月にキリンビール社を早期退職（6 千万円の株式投資借り入れ金を返済するために早期退職優遇制度 52 歳退職金 2 倍 4 千 8 百万円を穴埋めに使用）して第二の人生を模索していた時に、村田専務理事から声をかけられた。これは、たまたま時を同じくして当時の中野事務局長が退職してポストが空いて、人

件費枠が出来て 1 人採用が可能になったためと、翌 92 年秋に開催が決定していた第 12 回アジアカップ広島開催（開催経費 1 億 8 千万円の大事業）の収支が協会最大の課題でもあった。

おっしゃってりましたが、

当時の村田忠男専務理事が何でも屋の協会事務局の中に、金儲けだけを専門に行う「事業部」を設立したのは、岡野さんばかりでなく当時の幹部の最大の悩み

ビールさせたい強い願望があった。92 年

1 月から無給の専務理事付のお試し出勤が始まった。岸記念体育館の中の小さな部屋に職員 10 名がひしめいていた。中野事務局長追い出しに成功した若手が事務局長に昇格し新体制に移行した矢先に協会は事業部を設立して財政的な課題に専門に取り組む独立採算事業部体制を目指していた。

4 月には正式に初代事業部長に就任した。専務理事は笑いながら言った。「キリンカップとアジアカップを成功させたらボーナス 100 万円やるよ！」と。協会の財政は、選手登録費・大会利益・スポンサー収入などであったが国際大会でもチケット収入はまだまだ少なかった。チケットを売ることが一番手っ取り早いことは誰もがわかっていたが結果としてガラガラで冠スポンサーに依存する体質であった。キリンカップについては、キリン社在職中に松本正雄大先輩のお力でキリン社の協賛を取り付け赤字体質は脱却していたが、アジアカップは魔物であった。

キリン社・キリンシールドラム社在職 30 年は営業一筋の人生であり、売ることには絶対の自信があった。自分の給与の 3（4 倍の利益を稼がないと協会には居づらくなるというプレッシャーもあった。事業部長 11 チケット部長の認識に立つての日々が始まった。

「キリンカップ」—— チケット売り込みに奔走

久保田 秀一（昭和 37 年卒）が財政だったことを裏付けていると思われる。

事業部を初め、各部で行った改革改善の内容と考え方を振り返ってみたいと思います。

当時の協会は、国立競技場などの代表戦の大会は、直轄事業で都道府県協会には当日の会場の運営を委託していた。チケットは、当日売りが基本で、前売りは協会の職員が最寄りのスポーツ店に実券を販売委託し試合後に精算に回っていた。従って、試合当日の天候に大きく売上は左右され、雨にたたられた国際大会の収支は悲惨であった。ピアガーデンみたいなものであった。

直営で仕切った背景には、他人に販売を委託しても売れない上に手取りが少なくなるという発想である。あれから 20 年たった現在では当たり前になったが、オンラインでの販売に特化することにした。チケットピア・チケットセゾンなどに飛び込みで折衝に回った。JR の東日本・東海・西日本・四国・九州も回った。JR はチケット取り扱いイベントのポスターは無料で駅構内と車内に掲載してくれた。主要駅のみどりの窓口で販売が始まった。国立競技場の電光掲示板に「サッカーのチケットはチケットピア、チケットセゾンでお求め下さい」を掲示した。

試合を主管する東京都サッカー協会での販売もオンライン業者の手数料（10（12％）を上回る 15％で委託した。全く収入のない主管協会は目の色を変えた。登録チームにチケットの幹旋を開始した。一般から予約も受け付けて競技場渡しも始めた。就任 3 年目のキリンカップ（国立競技場）で初めて完売を達成した。1 試合 2 億円の収入であった。満員の国立競技場で目を細め笑みを浮かべる長沼会長に一言いった。「これが満員です」と。会

長は静かに感慨深げにうなずいていた。

「アジアカップ」—— 学校をしらみつぶしに歩く

大会運営の打ち合わせが始まった。8 カ国が来日し広島市と尾道市 2 都市 4 競技場で開催されるこの国際大会の運営責任者ではあったが、これは若手の協会職員に従って運営体制は決定した。問題は勝つことと 1 億 8 千万円の大会運営費をいかにチャラにするかであった。

広島の実業家が建設中の 5 万人スタジアム、ビッグアーチを見に行つて驚いた。モノレールも予定されていたが、広島駅から 1 時間もかかりしかもバスが日に何本の一本道であった。2 年後のアジア大会のメイン会場用に建設され、サッカーアジアカップの開幕戦がこけら落としであった。AFC からピーター・ベラパン会長以下全役員が来日するこの大会で、ワールドカップ招致への足がかりを狙う日本協会の期待とは全く裏腹の現実が、山中奥深い建設中の競技場にあった。

数ヶ月前から広島に入った。協会の若手が部長がいねーと文句を言ってきた。場所が場所だけにチケットピアの売り場は、広島市内に 2—3 ケ所しかなく、日本代表戦がポツポツ売れるだけで絶望的であった。外国チーム同士の試合のチケットは皆無に近かった。

チケット販売してくれるところはどこにも頼んだ。女子高校の構内売店にも行った。日本が勝ち進んでくれれば何とかなる見通しではあった。決断した。開幕戦の招待券を 2 万枚持つて山中の小学校・中学校・高等学校の校長先生や教頭に生徒や父兄の動員観戦をお願いした。臨時のシャトルバスも広島駅など 3 駅から延べ 50 台を運行させた。外国同士の試合は、登録チームを動員すべく招待券を配りまくった。

開幕前日、広島入りした AFC 役員に同行してきた小倉（現会長）さんが聞いてきた。「明日のチケットは何枚売れますか？」「1500 枚です」。小倉さんは顔面蒼白になった。5 万人のスタジ

アムにたった 1500 人！しかし、当日の入場者数は 1 万 5 千人を超えた。日本代表が決勝に進んだことも大きく、延べ入場者数は、31 万 6 千 4 百 96 人（1 試合平均 1 万 9 千 7 百 81 人）で終わった。大会経費を賄つて余りある 2 億円の収入であった。外人同士の試合にも日本では大勢の観客が入る国との評判になったそう。100 万円ボーナスの話はいまだに果たされていない。

「天皇杯」——

全試合を有料化

大会要綱を変更した。全都道府県代表チームを参加させ、社会人チームに限定せず高校チームにも門戸を開放して参加させた。都道府県代表チーム対抗戦を、2 回戦で行った。すべて有料試合として、大会規定を改定して主管協会がチケットで儲かる規程に変更した。チケット販売研修会を日本の中央の岐阜県で開催し、全国の協会に売ること売り方を研究させた。各協会は目覚めた。

もちろん日本協会はその売り上げの大半を戴くのである。年末にかけて各地で開催され、J チーム同士の試合になると売上が膨らんだ。J リーグが出場料を要求してきた。それまで国立の決勝は日本協会直営であったが、東京都協会に移管した。東京都協会はチケット手数料や主管料などで 2 千万円ほどの収益を上げ、法人化基金とした。各地の決算に伴い順次日本協会に収益金が振り込まれてきた。重松専務理事が専務理事室から眼鏡片手に飛び出してきたのを覚えている。「天皇杯が偉いことになった、4 億（予算 1 億 5 千万）を超えている！」事業部 3 年で、今度は女子部長を命じられたのである。



関東西松会 有志の会

平成22年は、7月6日一橋クラブ「二葉の間」にて、ロイヤルエージ13名の参加を得て有志の会（昼食懇談会、写真）が開かれました。

出席者：外岡（昭23）、高田菊（28）、神代・宮田（29）、高田勝（30）、志摩・中岡・橋本・松丸（31）浅井・佐竹・中路・日方（32）

毎年のことながら、最長老に入る外岡氏の出席および神代・中岡・佐竹3氏のそれぞれ山口・兵庫・大阪

からの遠距離参加がみられました。ご苦労さまでした。



関東西松会有志の面々（一橋クラブにて）

時恰もサッカーW杯の準決勝が始まる時期にあたり、どこが勝ち進むかわけの花が咲きました。そこで各人に優勝予想をしてもらったところ、ドイツ8名、オランダ3名、スペイン1名、ウルグアイ1名に分かれました。（結果は橋本氏一人のみスペイン優勝を的中させた形となり、サッカーの勝敗はまことに水物だと痛感した次第）。

なお、昼食時間の後はバーラウンジに移り、各自の近況報告などを含めた懇談を継続して夕刻散会。

本年も6〜7月頃に本会の開催を予定しています。一人でも多くの有志が参加されることを期待します。

松丸 鉦市（昭和31年卒）

出場できるだけでも喜ぶべきだ」という悲観的な結論に達した。秋の懇親会では生憎小生はロシア出張で参加できませんでした。春にした予想の反省もあったと聞いています。

10年も、三商大戦が09年の神戸大学に引続き、大阪市立大学であり、有志が応援に行きましたが、それを上回る東京名古屋方面からの応援も含め、人数では神戸、大阪市大を完全に圧倒しました。

現役は日ごろの実力が発揮できず惨敗、OB戦も人数では圧倒したもの、平均年齢は、相手のほうが数段若く、残念ながら走力負けの部分もありこれまた惨敗でした。

前日の豪雨の影響で大阪市大のグラウンドはかなり傷んでおり、現役にとつてボールコントロールが難しかったように思います。09年の神戸大学も当日朝の雨でグラウンド状態は良好とは言えませんでした。

試合後は場所を大阪駅近くの北新地の料理店に変え、大倉さんからのおいしい月桂冠の提供もあり、現役代表との懇親会で大いに盛り上がりました。

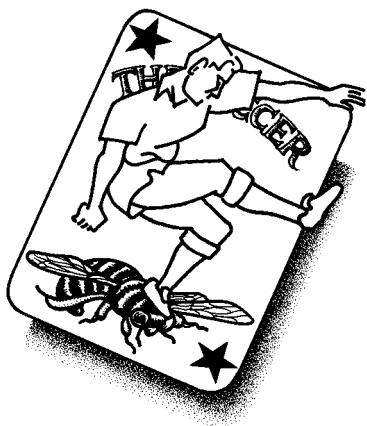
三商大OB戦は完敗―関西西松会

本年はワールドカップの年であり、春の懇親会では、直近のセルビア戦を観戦した石川、宮脇両氏より戦況報告があり、全員「W杯は絶望

隔世の感

昨年から、西松会会長という大任を仰せつかり身の細る思いをしております。その割に体重は努力の甲斐もなく、一向に減りませんが。その前の副会長時代を通じて、学生諸君と話をする機会も得、またリーグ戦も何試合か応援することができました。

卒業して早いもので40年が経とうとしています。変化が多いのは当たり前前のことですが、いろいろな面で「隔世の感」



を味わっているこの頃です。

サッカーにおいては、技術面では格段の進歩を遂げています。我々の時代は、半数近くが大学に入って初めてサッカーに取り組んだものですが、最近では、多くは小学校からボールに親しんでおり、ボール扱いに関しては雲泥の差といえます。う。例えば、昔のバックスは、ただただボールを遠くに蹴ることのみに集中、多少の余裕があれば、センターラインのタッチ際を目指すのがせいぜいでしたが、今はきちんとパスを繋ぐことができるようになってきています。

我々年寄りから見ると、時折危なっかに見えることもあります。このような変化は「橋だけでなく、他大学でも」と進んでいるわけで、競争ということでは、ますます厳しくなっているのは当然のことです。球際の強さでは負けていないと思いますので、今年のリーグでの優勝を期待しています。

学生生活というか就職面でも「隔世の感」は拭えません。昔は、先輩方の活躍のお陰で、「就職貴族」といわれるほど、よほどの高望みをしない限りは、それほど焦らないでも何とかなったものです。その裏付けもあって、サッカーの練習にも集

中できたのかと思いますが、今は、企業側の求人活動の変化もあり、個人の活動（スポーツ活動も含まれてしまっている）が重視されなくなってきたようです。一つは、人事採用担当者の事勿れ主義という横並び意識によるものと思われ、求人数の減少が拍車をかけてきて、面接なり試験までに行けないケースが増えているそうです。そのため、どの企業も同様の基準での選考となり、入社後「最近の若者は個性が…」ということに繋がってきているのだと思います。

企業側も反省の意味もあり、改善を求めているところであり、いわゆる、「先輩の引き」というところに戻りつつあるとも言われています。そこで、西松会会員の皆様の強力な支援に期待したいところで、すし、それがサッカー部の強力なサポートにもなるかと思えますので、是非ともご協力いただきたくお願いする次第です。

学生諸君も、「寄付回り」の機会を活用して、会社の雰囲気を知ること、先輩とのパイプを作ることに入力して欲しいものです。

会長 竿代 興志
（昭和46年卒）

やっているようだ。

昔、松本高校と名古屋の第七高等学校の試合が松本の北のグラウンドで行われ、S・O・Iも参加したが、陸上競技も行われて松本、七高、S・O・Iの三者の対抗戦であった。100mでは私は名古屋の折下氏について18・5秒だった。兄さんの折下章氏は弟を愛人の数学家だといっていた。

その時、外岡君は400mに挑戦したが、だれも参加者がなくて黙々と一人で走って一位だった。

S・O・Iでもバックから、ドリブルしてシュートまで持つて行く走力を維持している。正に「鉄人」で、松本弁では「スクのある人」である。

奥村 一郎（昭和21年卒）

「S・O・I」

鉄人「外岡諒二郎君」

1. S・O・I

サッカーO・Bインターハイの略で、旧制高等学校のサッカークラブであった。慶応や早稲田も入っていたので、我々のキャプテンの瀬藤俊雄の兄さん進一氏（東京高校）に頼んで「東京商大予科」として入れてもらった。

当時練習は「駒沢第2」とか、「第一生命用賀」などでやっていた。春秋には大会も行われた。私は駒沢公園の北のグラウンドで松本高校と対戦して開始後すぐ両膝を捻挫して其処にあった竹棒2本を突き家内に付き添われて、通りまでやつとの思いで出てタクシーで帰った。

海外遠征に参加したのは、89年の豪州

追悼〜いつも未来を語った森重さん

大先輩である森重 利直さんが昨年、亡くなられた。昭和 24 年のご卒業で、当時は関東大学リーグの一部で活躍されたと、この西松会新聞の第 2 号に寄稿されている。

私と森重さんとの最初の出会いは、確か寄付回りの時だったと記憶している。その頃、森重さんは当時のマツキャンエリクソン博報堂の副社長。まだ 40 歳位の若さだったと思う。黒い学生服姿で神田の小学館ビルのオフィスを訪ねた私には、外国人相手にさっそうと指示を出す森重さんは、まぶしかった。こんな世界があるんだなあ、と鮮烈に記憶している。ともかく森重さんはカッコよかった。亡くなるまで、ずっとカッコよかった。

いつの頃からか、そんな森重さんを開んで食べて飲んで、好きなことを言い合う小さな会ができた。主にマスコミ・広告業界で働いているメンバーが、大先輩の森重さんにもズケズケとモノが言える実に自由な空気が魅力的だった。レギュラーメンバーは福本浩君（昭和 52 卒）、五味正秀君（昭和 55 卒）、田中剛君（昭和 58 卒）、島田喜広君（昭和 59 卒）、そして私。時々、イモケンと呼ばれて愛されている佐藤博子さん（昭和 54 津田塾卒）なども加わっていた。会の名前は、いつの間にか「ひざまくららの会」と呼ばれるようになった。

これは現在、テレビのディレクターとして活躍している福本君が、海外で苦学している時に母校を思っつくった一橋サッカー部応援歌の歌詞の一節に由来している。（この歌は西松会新聞の第 1 号の一面に「幻の一橋サッカー部応援歌」として紹介されている。）

そんな「ひざまくららの会」は、何か口実があるたびに開かれていたが、80 歳を超えられてもなお、オグルヴィ・アンド・メイザー・ジャパンの名誉会長としてオフィスに通っておられた森重さんも、サッカーの後輩たちと会うのを楽しみにされていた。名誉会長という立場の大先輩に、自由に話ができたのも同じサッ

カーのボールを蹴ってきた仲間という共通意識があればこそのもだったろう。

森重さんは、過去を振り返って懐かしむのではなく、いつも明日こと、未来のことを話されていた。80 歳を超えられても、そうだった。新しい考え方の話、デジタル技術の話、日本の将来の話。今も、「あのなあ、土井・・・」という森重さんの、くつきりとした言葉が、耳にこだまする。

土井 徳秋（昭和 45 年卒）

良き仲間と

ライバルたちとの交流

私が今サッカーに関することで楽しみにしていることは、リーグエスパニョーラの観戦と昭和 50 年から 53 年の卒業生を中心とする東大 O B、一橋 O B、東大職員チームとの年 1 回の定期戦参加です。1995 年に昭和 52 年卒の山根さんと昭和 51 年東大卒の池森さんが中心となって発足した定期戦です。

両校は昭和 49 年から昭和 52 年までともに関東大学リーグ 2 部で戦った良きライバルです。定期戦後の懇親会では、和気藹々とした中、戦評、得点者の自慢話、失点に関与した者の反省談、野次など酒を酌み交わしながらのまことに楽しいひと時をご家族の方々を含めて過ごします。私は海外、関西に勤務していた関係もあり 2004 年の第 9 回から参加し、仕事の都合で参加できなかった第 13 回を除いて 6 回参加し 7 得点 2 アシストを挙げさせてもらいました。

米国駐在中は 94 年にワールドカップを 5 試合観戦しましたが、ゴルフ三昧でサッカーはプレーせず体重も自分史上最高の 82 キロ（身長 178 センチ）まで増えて足よりも上体が前に出る始末で、とても走れる状態ではありませんでした。参加を指して散歩、自転車通勤からトレーニングを開始、ジョギング、ジム通いと毎年この定期戦にピークを合わせるべく調整し、

現在は 71 キロまで体重を落としてコンディションは卒業以来最高（？）です。

東大 O B のサッカーに関する情熱はうらやましくらいです。試合中も叱咤の声も含めてよく声をかけて勝利を目指して戦う姿を見ると、やはり先に関東 2 部降格してしまつたのもサッカーに対するその情熱の差なのかなと思います。定期戦もここ 2 年一橋が連覇していますが、東大はきつちりと遠方からの参加者を含めて昭和 50 年から 53 年卒近辺のメンバーをそろえてきます。一橋はメンバー不足で若い世代の力を借りての連覇となっています。

同年代の西松会会員の皆さん、少しトレーニングをすればこのレベルであればすぐに参戦可能です。対等な条件で戦うべく是非皆さんの参加をお待ちしております。

深谷 徹

（昭和 53 年卒、三井住友海上火災保険勤務）

前途洋々たる皆さんへ

少し前の経済誌に、我が大学は大企業への就職率がトップということで紹介されていました。皆さんはこの不況下にあつても、あり余るバイタリティと好奇心を持ち、貴重な学生生活を過ごしていることだと思います。

さて、かく言う私も、バブル冷めやらぬころに、大手金融機関に就職したわけですが、その後退職し、現在は小さな独立した会社を経営しております。その関係で、今回の寄稿のご指名をうけたようです。が、せっかく頂いた機会なので、懐かしい

学生時代を思い出しな

ら寄稿させて

頂くことに

します。

現在の会社は、中小企業ですの

で比較的自

由に意思決

定ができます。もちろ



OB戦にぎわった参加者60人

わりに結果の責任からも逃れることはできません。経営の指南書にあるような、ヒット商品を生み出せるセオリーみたいなものは、実際には無く、必要な情報や経営資源が不十分な中、勘やおもいつきで意思決定していかなくてはならないことも多々ありますし、また、思わぬアクシデントなどの不運に苦しむこともあります。いずれにしても、自由な分、無過失でも不可抗力でも、結果責任を引き受けることになり

ます。さて改めて自分の反省も含めて、学生時代の自由というものを考えてみると、とすると何もしくなくてもよいとか、社会にでる前の最後の遊ぶ時間というように、自由をはきかえていいないでしょうか。むしろ卒業して完全にルールが無くなったときにこそ本当の自由と自己責任が問われることを忘れてはならないと思います。皆さんが、社会にでると、日に日に責任が重くなり、最初は戸惑うかもしれませんが。そういう意味では、今は、責任の伴わない練習期間といえるかもしれません。

社会心理学者のエーリッヒ・フロムは、ファシズムへの傾倒を、自由を獲得した近代人が、孤独に耐えかねて、帰属を求め、権威に服従した結果と分析しています。そうした傾向は、現在で言えば、所謂、指示待ち人間の増加や、自分探しの長期化という現象に結びついているのではないのでしょうか。人は、自由過ぎる結果、意思決定に戸惑い、立ち止まり、選択の余地のない状態を居心地良く思うようになる可能性がありますがあるということだと思います。

皆さんには、就職率が良いことをもって「就職予備校」と思われないように、どのような世界に進まれるにしても、楽しくも厳しい世の中を自分らしく生き、皆さんの本領を発揮してほしいと思います。あまり目さきのことを心配しすぎないで視野を広く持ち、多角的な価値観を受け入れるのがコツだと思います。もともと、既に日夜厳しい練習に励む道に身を投じた皆さんは、自らの意思により一歩踏み出しているわけですから、杞憂かかもしれません。

卒業すると、運や偶然のなど理不尽な要素に左右されることも多いでしょう。そのような中でも投げずに、近い将来、若い

皆さんの力を、閉塞感漂うに日本の社会に役立ててほしいと期待しています。

大石 嘉彦

（平成 5 年卒、大嘉倉庫社長）

弁護士業務に勤しむ日々

ご無沙汰しております。私は、平成 12 年に弁護士となり、現在、霞ヶ関にある「三宅坂総合法律事務所」という法律事務所

でパートナーとして勤務しています。偶々昨年秋季に事務所の同僚と他事務所の弁護士とフットサルをやりましたが、ボールを蹴るのも何年振りかという状態となつて

います。まあ年ですし。会社法務はコアにありながらも、法的サービスは社会に雑多に存在し、弁護士

と言っても取り扱う分野は様々ですが、現在、私は、会社法務のほか、事業承継（中

小企業の M & A や親族間承継、上場企業の M B O 等です）、事業再生（民事再生、

会社更生等のいわゆる企業再建です）といった分野を中心に、不動産、相続、労働、

医療等を手がけています。団塊の世代のリタイア問題は、企業オ

ナーにもあてはまり、ここ 10 年は事業承継の問題が社会的にも取り沙汰されること

になると思います。さて、弁護士としての日常は、事務所

で、電話やら打合せやら判例調査やらドラフトやらをしているというのが大半ですが、

やはり、裁判所にもそれなりに行きます。私は紛争案件も数多く取り扱っており、大

学時代の私からは想像できないかもしれませんが、「法廷で証人尋問」というのも結構行

っております。また、事業再生ということになりますと、地方の旅館やメーカー

の再生案件も多く、こんなことを言つては怒られるかもしれませんが、多少の息抜き

もしております。ドメスティックな業務のため、皆さんと違つて、仕事で海外に行く機会は少なく、

若干の物足りなさも感じますが、日々業務に取り組み、また、研究に勤しんでいる

鎌倉 一輝

（平成 7 年卒、三宅坂総合法律事務所）

6 年ぶりの帰国、11 年ぶりの球蹴り

昨年 7 月に 6 年間の米国滞在を終え、久しぶりに帰国しました。長いようであつという間の 6 年でしたが、その間に我が家では 4 歳だった息子は 10 歳になり、妻と私はアラフォーなる年齢になり、世の中もリーマンショックなどいろいろな出来事がありました。

仕事上は中南米への出張が多く、スペイン語を身に付けたり、現地の文化や料理を体験することもできました。中南米というところから遠いこともあり、どこも同じような国に思えますが、実際に行つてみるとそれぞれ国民性や文化が異なります。例えばコロンビア。爆弾テロやワールドカップ敗退後に選手が殺されるなどの物騒なイメージが日本ではありますが、実際は治安も良くなつており、素朴な現地料理はおいしく、国民性は南米では珍しく勤勉です。あと、コーヒーもおいしいですね。

プライベートでは、やはりいろいろな旅行が思い出です。その中でも一番はガラパゴス。進化論で有名なとおり、独自の進化を遂げた動物がうろろしています。手を伸ばせば触れるほどの距離でイグアナ、ゾウガメ、アザラシ、軍艦鳥などの動物を見ることができ、息子も大喜びでした。

そうした中、漸く帰国となったわけですが、6 年という期間はそれなりに長かつたようで、しばらくは環境の変化に戸惑うことばかりでした。特に息子にとっては初めての日本の学校となり、全てがわからないことだらけ。初めて教室の掃除をしたときは担任の先生に「なぜ掃除機が無いの?」と質問して困らせていたそうです。

サッカーの方は息子が生まれて以来、ともにプレーしておりませんが、帰国後に息子が学校のサッカークラブに入つた関係で、保護者大会なるものに参加することになりました。最大の目標は怪我をしないことですが、これを機にまたボールを蹴りたいと思います。

中村 克

（平成 8 年卒、三井物産勤務）

東大との

定期戦開催を願う

昨年は我が家にとつて、大変な年であった。4月に子供たちの高校・大学進学とあわせて、8年ぶりに大阪単身生活に別れを告げたままでは順調であったが、その後、両親が相次いで亡くなり、娘が大病をして入学後までもなく大学を休学、自分自身も体調を崩し3か月ほど会社を休んでしまった。ようやく調子が戻り、山根先輩(昭52年)が司令塔で何年も続いている検見川での秋の東大OB(泥蹴会)との試合や、新年の横浜での西松会OB戦に参加出来た。倉崎君(昭57年)が幹事をしてくれているフットサルにも時々参加している。しかしながら家族には、お父さんはサッカーが下手だという印象を持たれているのが残念である。

今年は卒業30年を迎える。昭56年の卒業同期は10名いるが、皆それぞれに要職に就いて頑張っている。20年目、25年目と節目の年には浜名湖や宇部で集まったが、今年は京都で集まろうかと勝手に考えている。仕事の話はほとんどせずに学生時代の昔に戻ってワイワイやるのは、自分のルーツ感じるような気持ちになつて嬉しいものである。

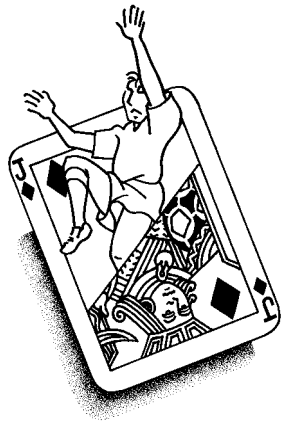
私は現在ステンレス鋼の営業をやっているが、この仕事をやっているのも4年生の時、新日鉄の押本先輩(昭48年)が東大御殿下グラウンドに採用に来てくれたおかげである。学生時代はほとんどサッカー部の活動だけだったと言ふべき生活であったが、そのことについては誇りを持っている。連日真つ暗になるまで練習に打ち込んだし、合宿や遠征・試合も手を抜かずに必死に頑張った。今でいうJリーグの柏レイソル(日立)や浦和レッズ(三菱)にあたる社会人の日本リーグチームとも試合を行い、一生懸命に努力した。唯一心残りは、東京1部リーグの最終戦で不可解な判定で東大に引き分け、関東リーグ復帰のチャンスを逃したことである。痛恨の思い出である。惜しいところで昇格を逃しているここ数年の現役選手も、同じ気持ちであらう。

会社に入ったら、社内には東大サッカー

部OBがたくさんいて、東大OBとの交流機会が非常に多い。そこで感じるのは、東大は一橋ではなく京大をライバルと考えていることである。それは一橋と東大がめつたに同じリーグで戦わないということもあるが、東大と京大がOBを含めて定期戦を行っていることにあつてと思う。ボート部は伝統の東商戦があるが、サッカーは東大との定期戦がない。

現役とOBが一体となつて、東大との定期戦を開催することに出来れば、現役選手にとつても西松会にとつても有意義なものと思う。重みのある定期戦にするためには、現役から若手OB、年配OBまで幅広くいい試合が出来ることがあつて。定期戦に備えて健康にも気を配り、勝負にこだわつて西松会の一体感が増すことは間違いない。開催はできれば交互にホームとアウェイでの戦いとしたいものである。そのためには、御殿下の立派な人工芝のグラウンドに釣り合うようなグラウンドが小平にも欲しい。そういうことが出来るように、自分の出来ることを少しずつやつてみたいと考えている。

日置 慶太
(昭和56年卒、新日鉄住金ステンレス勤務)



40過ぎてから

サッカーがうまくなる。

私は現在50歳であるが、学生時代よりもサッカーがうまくなっている。私の学生時代のプレーを知る前後の代の人からもそのように指摘されるし、自分自身そう思う。大学に入ってからサッカーを始めたので学生時代は下手だった。ボールが足に付かず、周りが見えていないプレーヤーであつた。

大学卒業後、10年程度、会社のサッカー

チームに入ったが、そこでプレーがうまくなったということはない。40歳を過ぎてからうまくなったのだが、その理由を自分なりに分析してみると以下の点になる。(1)フットサルを始めた事。(2)プレーする環境が適当(自分のレベルより上)だったこと。(3)楽しみながら、一定期間のめりこんだこと。

結婚して、二人の子育てに追われ30代はサッカーから遠ざかつた。子育てが一段落した40歳くらいに誘われて初めてフットサルを体験。その後10年間、週に1〜2回コンスタントにボールを蹴つてきた。特に、上達に寄与したとを感じるのが、5年程度通つた土日の個人フットサルである。

朝8時から2時間、コート4面使つて10分のゲームを2、3回続けては1回休むペースで、集まつたメンバーでフットサルをエンジョイ。土日の早朝なので、天気、体調等を考慮しつゝ、週1回のペースでコンスタントに継続できた。メンバーは20代、30代が多くほとんど経験者。テクニクのある彼らと一緒にプレーしながら色々な技を見よう見まねで習得。狭いコートなので、ワンタッチのプレー、キック・トラップの正確性、攻守の切り替えの速さ、ポジショニング、ボールを持たない時の動きなどが特に重要。周りが徐々に見えるようになり、パスが出せるようになっていつた。ボールに触る頻度も多く、ボールタッチも少しずつ改善。

体力も戻つてきて、若手にも走り負けないようになってくると、週末が待ち遠しくなつてきた。そのうちに、平日夜にもフットサルを加えたり、土日に11人制のチームに参加したり、のめりこんでいつた感覚。一時期凝つていたゴルフもやめて、気が付いたらサッカーがうまくなつていた。まさに継続は力である。

最近、似たような事例を発見。一緒にフットサルをやっている高校生は1年ほど前に、高校の部活を辞めて時々一緒にフットサルをやるようになった。週に1、2回フットサルをやっているだけのようだが、この半年でものすごくうまくなった。なんとなく私の3原則もあてはまっている感じがする。特に最近サッカーから遠ざかつている会員各位に、参考にして頂ければ幸いです。

倉崎 嘉幸
(昭和57年卒、日本GM勤務)

「素晴らしい哉サッカー、ありがたき生涯スポーツ」

1986年卒、幸松です。現役時代はGKをやつておりました。

小平での数々の思い出が、つい昨日のことに目に焼きついていますが、いつのまにか満で48歳になりました。諸先輩の皆様、現役の諸君には大変ご無沙汰してしまい、恐縮しております。

今回は近況報告を兼ね、生涯スポーツとしてのサッカー礼賛です。

縁あつて、1997年末から横浜市青葉区あざみ野(東急田園都市線沿線)に在住しております。現在大学1年生になる息子の小学校入学と同時に地元サッカーチームと関わるようになりました。気がつけば毎週末サッカー漬けで、週末が待ち遠しくてならない毎日です。

自分のサッカーもさることながら、小学生のコーチングにも深く携わるようになりました。因みに、自分のサッカーではGKからのメ

社会人リーグの実戦から日本サッカーを思う

2010年シーズン私の所属するチームは、社会人神奈川県2部リーグを戦つた。神奈川県リーグは3部制で、2部は地元クラブのトップチームが主体で平均年齢は20歳程度と若く良く走るチームが多いリーグだ。対する我がチームは平均年齢30歳のサラリーマンチーム、2部残留を目指したが、1勝も出

来ずに3部降格が決まつた。ここでは、試合の結果はさておき、リーグを戦う中で気付いた幾つかの点から、日本サッカーのレベルアップと今後の方向性についてコメントしたい。

我がチームの2部での戦いは8年ぶりだったが、その以前と比較して幾つかの違いに気付いた。まず各チームの戦い方。全てのチームがDFラインからのビルドアップをしつかりやつてくるようになった。ボールを失わないようにとにかく繋いで来る。スペースが空いてくると、そこからドリブル、ワンツーで仕掛けてくるが、無理しては仕掛けては来ない。個々のプレーにおいては、基礎技術はしっかりしている選手が多くなつており、トラップ・パスの技術はかなりうまくなった。そのため、正しいポジショニングを取り、スパー

卒業を目指し、CBやあらうことかFWにも色気を出している今日この頃です。武器はボンバーヘッドです(笑)。Jrのコーチングは去年6年生の卒業を見送り、現在は1年生と年長さんの面倒を見ている。現役時代の私を知っている会員各位が聞くと笑つちゃうかもしれませんね。「お前がフィールド?お前がコーチ?」つて・・・

ここからは我が地元チーム、「あざみ野キッカーズ」の宣伝です。1983年創立、地元との繋がりを大切にしている素晴らしいチームです。モットーは「揺り籠から墓場まで」。まさにそのモットーの通り、幼稚園児から小学生、高校生、上は70歳台の大先輩まで、老いも若きも、上手い者も、そうで無い者も、毎週末元気に楽しくボールを追いかけています。サッカーとあざみ野キッカーズ好きの地元の仲間

に囲まれて、本当に幸せです。

挙句の果てには、あざみ野キッカーズのメ

編集後記

私が現役時代には、OBの世代区分は戦前卒と戦後卒でした。昭和40年ごろで戦前20年、戦後20年で区切りもよく、戦前卒は「大先輩」と別格扱い、戦後卒は身近な兄貴分の「先輩」という感じでした。しばらく経つて、昭和30年代までと我が世代以降とは大分違うなということに気づきました。

最近の区分は昭和と平成でしょうか。ご寄稿をお願いするに当たつて世代のバランスを考えます。単純に若い世代の「平成」と考えていたのですが、平成卒の投稿に「4代のおっさん」という文言を見てあれれと思ひました。もう平成も23年、一括りにできないなと。

今回は世代構成で若干バランスを欠いてしまいました。西暦で見ると2000年以降の方があまり見当たりません。20世紀卒と21世紀卒の区分が必要だったのでしよう。反省しています。西松会も100年近く、歴史の糸を紡いでいくためにも21世紀先輩のさらなる登場に期待します。

(昭和41年卒、相良 保彦)

ンバーのみならず、Jrチームのパバさん達も巻き込み、昼は一緒にボールを蹴つたり、夜は飲み会でサッカー談義で盛り上がりつたりと、サッカーをきつかけとした地域コミュニティで非常に充実した週末を送っています。これも、西松会にサポートされた一橋大学サッカー部での日々が私の財産となつており、先輩・仲間・後輩の皆さんのお陰と感謝しています。

最近では、3年下のK君もJrをきつかけに入会しました。東大サッカー部の先輩OBも数名いて(東大泥蹴会メンバー)、その中には都立T高校で我がY先輩とサッカーをしていたという方(Iさん)もいらつしています。世間は狭いですね。

東急田園都市沿線の皆さん、是非、日曜日の午前はあざみ野第二小学校に来てみて下さい。お待ちしております。

まずは以下URLをクリックしてみてください。

<http://home103.iscom.net/azk/>

幸松 栄夫
(昭和61年卒、日産自動車勤務)